

退

屈

(一) 力瘤の遺場

これを表べから見た技術家の調子は、如何にも陽氣で洒脱
て快活で、至極呑氣な平和な樂天的なものではあるが、併し一
歩其腹底に迄立入つて考察すると、其處には只何となく陰鬱

などす黒い打解け難い気分が澁むて居るではないか。多少すね氣味な隱遁的な若くは反抗的な影の傾分が蟠つて居るではないか。而して此の如きものは畢竟鬱勃たる霸氣と遺瀨なき不平との内昂を強めて自分に抑へくして居た長い間の習慣から自然と誘發し來つた、一種の結滯的^{△△}症狀たらざるであらうか。

斯かる結滯的症狀を起すに至つた原因の一つには、外に其社會的勢力の横屈して凡てに面白からざる所以もある、内に相互の連鎖の不十分にして熾んなる團結的氣力の燃えざる所以もある。若くは彼の餘りに順當過ぎ平板過ぎたる斯界

の過去に魅せられて一種の鑄型に囚はれ過ぎたる所以もある。が、同時に又他の重なる原因の一つとしては、抑も技術なるものゝ研究に兎角全力的の興味^{△△}の乗りがてなる所以があるとは思へぬだらうか。

一體、技術が退屈だなどゝは、それは技術家自身の口から云はれた筈の義理ではない。それに實際何方を向いても、技術家ほど神妙に忠實に將た熱心に、夏は熱汗を揮ひ冬は凍血を搾つて、孜孜營々と其任務にいそしむものは無い。にも拘らず、技術が退屈だなどゝは以ての外の云ひ分である、技術を侮蔑するも亦甚しい次第であると、矢鱈息巻かれさうなる問題

である。如何にもそれはさう無くてはかなはぬ、又實際にも是非さうあらざる可からざる筈である。然るを今敢て我等如きの貧しき一個の經驗を以て、濫りに斯かる言辭を弄し、又は極めて小さき自家の専門によつて廣く斯界の一般を累せんとするが如きは、云はうやうなき不所存であり不都合の沙汰である。とは云へ、兎に角弱輩僕の如きものゝ眼に映する一個の「技術觀」として忌憚なくこれを述べれば、僕は今の我技術に甚だ力瘤の入れ甲斐なきを感じ、我技術家そのものに甚だ働か甲斐なき生活たるを歎せざるを得ぬのである。力の入れ甲

斐が無いとはこれに我全力を打込む程の興味が乗り得ぬからである。働き甲斐が無いとは、其處に自己を主張し、顯現し發展せしむる所以の方法の容易に見出されざる故である。そんな理屈はない又そんな事實も無いと云ひ得る人は仕合せである、その人の天才技能がその人の立場と境遇とにびたりと出逢つた満足さを其人の爲めに何より祝福せざるを得ぬ。然かも遺憾ながら僕等の如き頗る平凡な所謂出來合技術家を中心として暫く其左右を見廻す時には、如何にも我技術の繩張、我技術家の立場がつまりまらなくみぢめに物足りなく息詰つて見ゆるのを又如何ともし難いのである。

學問の面白味は夫々自家の見地に應じて無遠慮に我獨創の氣焰を揚げ得るからではないか、藝術の面白味は我拵へ上ぐる作品の一つ／＼に自由氣儘な我人格の閃きを添え得るからではないか。技術は科學にして同時に術であるとは云ふが、併し科學として其處に何れ程自由に獨創の見地を争ひ得る餘裕があらう、術としては又其處に何れ程氣儘な手腕を見せ得る場合があらう。凡てが經驗である、戮力である機會である、其凡ての人爲的拘束と他力的活動との中から何處に何う満足し能ふだけの我を顯現し得るのか。數の世界、物質の世界、機械的作業の世界、それも一種の興味ではあらうが、併

し我には尙更尊い大事な一生がある。然かも此大事な一生を打込むて悔むざるだけに其研究に「我」を發揮し、其製作に「我」を刻み付け、將た其事業に「我」を記念せしむる程の興味が、そも何れだけ多く我技術の内に見出され得るのであらう。或は沒我の精神になれと云ふか、なり得る人は仕合せである、が若き血に湧く我等、功名心に悶ゆる我等の身空では、兎ても容易な悟りや諦めて左様な修業は遂げられぬ。自我の閃めきの鈍い影の薄い境遇を態と好き好んで、我から大事な一生をそれに投出さうには餘りに興ある今の世の中ではないか。

(二) 合鍵の多少

さらば退いて、寧ろ書齋の人となるべきか。

とは云へ「技術」なるものゝ一般的勉強に、そも何れ程の興味があつてのことか。由來技術の本領は科學それ自體には非ずして其應用である、學なるが如くにして所詮は術である。術の進歩は經驗に待たねばならぬ、經驗とは机の上の穫物では無い。されば技術の勉強と云つた處が、たかゞ或興へられたる機會の下に直接自己の關與せる一部局の範圍に限つて、曾

て他人が試みたる實驗の結果乃至經驗の次第を理解し是非し取捨する位が止まりて、其以上は何處迄も自己を突込むて行く興味がない、絶無ではないが稀である。それも其筈、其處には金と時との合鍵でなくては開かぬ新しい實驗の重扉がある、いくら勉強許りの死力を以てしてもこれを押破つて突進し得べき望みが無い、天才だからと云つた處で大した利目はない。金と時との合鍵、それを持つたものこそ仕合せてはあるが、それは多少共に或恵まれたる人々許りの専用であつて滅多に横合からは借用し難きものである。況や貧弱なる我國の現状を以てしては、其大事な合鍵の數とても所詮は知

れたものである。一二の扉は或は開け得ることもあらう、第三第四の扉と來ては何うか。縦しや我技術家の誰かゞ一番がけに折角或扉の前迄來た處で、合鍵の調達に手間取る中にはずいと他國の誰かに先を越されて仕舞うが落ち。結局我等御互は安仕込の案内記をたよりに何時迄も他人の開けた扉から扉を搜索しながら迎るより外ないのではあるまいか。其證據には今の多數の我技術家が老少共に頗る閑日月に富ひて、日頃定まり切つた職務以外には朝夕ともに至極呑氣な手持無沙汰の態ではないか。それでも若し世間並に世話しいと云ふならば、それは只其仕事の反覆それ自身が世話し

いのである、其仕事に伴ふ手數其ものが煩瑣なだけである。著述にした處が何時も同じやうな安手の案内記が蒸返して書かれるのみだ、雜誌にした處が何時も同じやうな工事報告が載せらるゝ許りだ。堂々たる大家ですら如何ほど斯學の蘊奥の自己に興味ある所以であるかを説くに及ばず、況や専門的にも些したる氣焰も揚げず研究も示さず、只頻りに其智惠の小出しにのみ忙がしげなるに見ても、大方今の技術のどん底に兎ても勉強許りでは開かぬ重扉の横はれるに困じて、頻りに其行詰つた門外に屈託しつゝある様子が見らるゝではないか。

或は間違つて居るかも知らぬ、無論間違つてあつて欲しいが何う間違つて居るとさへ誰も聞かして呉れさうもない今の斯界では、餘儀なく我等は自分一個の経験から割出した答案を自分勝手に書き立つるより外はない。我等の知る限りでは、今日の技術界は所詮自己の頭や腕許りでもつて何處迄もすん／＼先へと伸びては行かれぬ因業の世界である。金と時との道づれが無くては到底一步の勝味をだも許さぬ意地悪き競争である。歐米技術界の發展が今何の點まで押進むて居るか位は、これを見届けるにさしたる困難は無い、我等とても若し或一方面を限つて突進すれば必ず其窮極までは

漕ぎ付け得るに十分ながら、さらば其以上に誰が何う一步を抽んづるかに至つては、これは決して頭の問題では無い、勉強の力でもない、まして餘所の世界の如くに望遠鏡や顯微鏡の力でもない。即ち努力から云へば其處に躊躇があり、成功から云へば其處に破滅がある。此専門の何の點に勉強によつてのみ敢て自己を満足せしむる餘地があらう。

況や之等の専門の書のまた何たる興味なきものである。濫りに廣く且つ賑やかに雜駁無趣味の記述をのみ羅列して曰く何某の實驗はこれ、曰く某地の實例はこれと、さながら大道で商なう手品の種本めかしく、無闇に瑣々たる小智の斷片

層々たる小技の末節を羅列し來つてこれを忍び讀むだけすらが既に夥しい欠びの種ではないか。一體讀書の慰藉は人生最後の隠れ家たるべきであるが、然かも不幸なる我等は、我一生の努力と經驗とを擧げて資本とした處で、何うまあ此専門の書物からして究竟の滋味と無限の感興とを呼覺ますことを得やう。日に新に日に又新たな無数の著述はあるが、然かも其何れ一つにだも能く徹底した味解體讀、會心の妙趣を伴ふものがあらう。天下若し之等の書を友として、老の將に至るを知らざる人ありとすれば、それこそ寧ろ何たる悲惨な皮肉の骨頂であらう。

(三) 多數の贅

今の技術が其終局に於て存外行詰つた氣疎きものたる許りては、現に職業として我等が取扱ひつゝある範圍に於ても、それが意外に窮屈な不自由な階級的なものである。

腕の世界實力の世界と誰もが意氣込む今の廣い世の中にも、とりわけ真から腕の世界實力の世界であるべく想像せらるゝ技術生活が、實は存外古風な階級的な軍隊式の世界であるとは何うしたものか。が、それも技術即經驗と觀じ來らば

會得が行かう。經驗の多少は場數の多少である、場數の多少は年數の多少である、その年數を超越し得るが如き經驗は兎ても滅多な機會で逢着し能ふ筈がない。其處で自づと誰それは何學校の何年出身と云つた許りで直様其技術の見當が付き其地位が定まる位まで明瞭を單純な無事な行列を組んで、其間非凡な穎脱もなければ破的な落伍もなく、一列一隊押すなくの掛聲で年と共に誰もが同じ位の經驗を光らして行くまでである。

一體今の技術界で、獨り我のみ破格な功名を贏ち得る如くに想像するのが無理である。技術の男神は一人一個の方々

らいを實は何とも思つては居らぬ。多數の人、多數の力。渠が要求する生贄は常にそれである。無論多數の人を集むれば其處には伍長も要らう、組長も要らう、従て我等も或は此神の殊寵によつて將校株には存外入選するかも知らぬが、何しろ仕事の相手は鐵であり木であり石である。誰が大將となつた處で、結句同じ位の手柄は爲し得ると同時に又必ずしも我でなくてはならぬと云つた程の奇功も妙計もあつたものではない。云はゞ偶々其位置に据つたものがそれ相應の力を出すまでのことであつて、よし其人以上の策があり力があると自任して見た處で、其位置に坐らぬ以上は結句何の手下

しもならぬ。即ち我等はたゞ神妙に忠實に、序を追ひ列を正して、曹長から尉官に尉官から佐官にと、鰻昇りに經上つて行くのを待つだけのことである。或はそれが氣に喰はぬと横そつばうに飛出す途はあらうとも、縦には何うして、いくら苛つた處がまづは無駄なこと、たゞ宜敷寛々として氣長く其順番の經驗と共に到るを待つべきである。

然かも待ち得た處が何である。門前の彫刻に左甚五郎の名は残つても、本堂の大伽藍は誰の建築とも知られぬのが常である。方寸の壁畫や塑像にラファエル、ミケロアンジェロの名は喧しくとも、支那の長城、印度の灌漑、和蘭の埋立、埃及の

ピラミッド、羅馬の古水道に、誰が設計とも努力とも聞く者も無ければ答ふる者もあるまい。無論斯界の天才は右の寸法の外でもあらうが、それすら其名の聞てゆる割に其傳記の空虚なるは如何に。セメントの發明は誰か、自動車の創意は誰か、潜航艇の工風は誰か、知らるべくして知られぬ處が常に渠等の運命ではないか。技術家は何時でもさも得意氣に自ら技術を指揮したやうなことを云ふ、然かも思へば最後まで實は技術の神に弄ばれて引摺廻されて、そして此神の愛する多數の賢の其一片に徴されたのみに過ぎぬではないか。

(四) 朱萍漫先生

一步は一步に自我を展開し擴大して行く心奮闘に奮闘を重ねていよいよ勇み立つ心行けば行く程新たな境地に胸を躍らす心それが張り切つた人生の興味ではないか。行詰つた境遇におどくも自己を顧る心詫しさと退屈さに空しく自己をもてあつかう心たゞと只後ずさりにのみ曳かれ行く心それには何の頼みがあらう。先に立つ人々や一緒に進む仲間の歩き方ばかりを氣にして只管それと我歩調を合さんとするの便利かは知らねどそれが眞實自分を愛する遣

方なのであらうか。様々な自制自抑の経験にのみ馴らされて、やがては我ともなく無意識な機械的舉止に墮するの、安全かは知らねど、それが寔に生甲斐ある生活、苦み甲斐ある悶えを踏占めて行く道なのであらうか。とは云へ懸命の努力、眞劍の立合ひ、血の氣立つ奮闘を、我技術の世界で果して何處に何う發揮し得べきであらう。

莊子に昔し朱萍漫と云ふ男千金の家を盡し一生の智能を傾けて龍を屠るの術を學び、三年初て技成つて天晴れ屠龍術の名人とはなつたれども、然かも生を終る迄風雲の會遂に屠るべきの龍に遭遇し得ざるを哄歎したと云ふ。我等は我技術

術家が他の何の専門にも劣らざる多年の苦學と研鑽とを嘗めて天晴れ專攻の技術に屠龍の意氣頗る盛んなるにも拘らず寧ろ其日常の動作の餘りに屈托千萬なるを見る時漫ろに彼の朱泮漫先生を想起せざるを得ぬのである。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ。これは原稿の複製ミスや極淡印刷によるもので、本文の主要な意味を伝えることはできない。）